

Kb-P006

会場：Lounge

時間：6月26日 17:30-19:00

北部オマーンオフィオライトのカタクレーサイト様かんらん岩角礫岩について

Occurrence of cataclastic breccia (cataclasite) of peridotite in the northern Oman ophiolite

角島 和之[1], 荒井 章司[1], 森下 知晃[1]

Kazuyuki Kadoshima[1], Shoji Arai[2], Tomoaki Morishita[3]

[1] 金沢大・理・地球

[1] Dept. Earth Sci., Kanazawa Univ., [2] Dept. Earth Sci., Kanazawa Univ., [3] Earth Science, Kanazawa Univ.

<http://kgeopp6.s.kanazawa-u.ac.jp/Arai>

北部オマーンオフィオライトにおいて、新鮮なかんらん岩角礫と蛇紋岩化した基質からなるカタクレーサイト様角礫岩の露頭を2カ所発見した(Wadi Hilti、Wadi Jibjibah)。カタクレーサイトとは断層岩の一種で、基質と岩片が固結しているものをいう(狩野・村田, 1998)が、オマーンオフィオライトにおいてかんらん岩起源のものに関する記載は全くない。Wadi Hilti の露頭では約2mの間隔を置いて、2本のカタクレーサイト様角礫岩脈が観察できる。1つは脈の左右で約40cmの変位が認められ、他の1本は全く変位が無い。また岩片の並びには弱い方向性がみとめられる(岩片の長軸方向が脈と平行)。Wadi Jibjibah ではレンズ状のものが認められる。岩相や組織そのものはWadi Hilti のものと酷似しており、このレンズから派生した約5mm厚の蛇紋岩脈がみられることも特徴である。レンズの両側で変位は認められないが、岩片の並びには弱い方向性が認められる(岩片の長軸方向が脈と垂直)。基質部が蛇紋岩化を受けていることにより、もとの組織が解らず、初生的な岩相も推定できないが、予察的な薄片観察では基質部にトレモライトの他、硫化鉱物が多いことが確認される。H₂Oに富みSを含む流体による爆発的な角礫岩化作用がマントルセクションで起こった可能性が示唆される。